

## エゴン・シーレ作品における手の表現

金田佳子

シーレ作品における手の表現は、ユニークで多様だと多くの著作でよく指摘されているが、現在までそれほど深く掘り下げられることはなかった。先行研究ではシーレの母国であるオーストリアでも、故ルドルフ・レオポルド（以下レポルド）、クラウス・アルブレヒト・シュレーダー（以下シュレーダー）とヨハン・トーマス・アンブロジー（以下アンブロジー）案があるのみで、ましてや日本では皆無であった。

手の表現の全てに意味があるとは思われないが、図像学的にみて意味があるものと考えられるシーレ作品が数点ある。それゆえ、この点につき検討するのは意義のあることと思われる。本稿は先行研究であるアンブロジー案によるシーレの手ぶりや宗教芸術との関わり、特にビザンティン美術とのつながりについて再検討し、また独自の解釈を加え、図像学的見地から解明することを目指すものである。それにつきアントン・ヨーゼフ・トルチカが撮影したシーレ像《エゴン・シーレ》（1914年）とエゴン・シーレ作《広げられた手》（1913年）、《祈祷》（1913年）を研究対象とした。